

この世に悪の華を咲かせましょ
う！

凍夜

悪人（あくにん）現る！

ここは東京神華学園（とうきょうじんかがくえん）という有名な学園でここに
入れば将来は安定とまで言われる国が補助している学園だ。

広大な学園で生徒数も多く、日本で一番の学園とも言われている。

しかし、それは表の顔で、その裏では悪が蔓延っていた。

それを知るのには一部の教師と生徒だけで他の者には知らされておらず
普通に学園生活を送っていた。

その学園の地下にあるのが悪人（あくにん）と呼ばれる者達が
いる場所だ。そこは表の学園の中と同じで、普通に教室が
あるが、地下なので窓はなく、電気が消えていると昼でも暗い場所
だった。

朝、そこに登校してきた生徒がいた。

「まだ、誰も来てないな」

黒のブレザーの制服で、ネクタイを緩めており、だらじない格好を
している男子生徒だ。

彼がこの悪人の中の最強と言われている黒華凍世（くろばなとうせい）だ。

背が高く容姿も良いモテるタイプの男子だが、彼は人が
嫌いだった。誰も信じず、感情を消し、自分に害をもたらすものなら
女も子供も殺してしまうほどの悪人で、忍（しのび）だった。

忍、それは戦国時代に裏で活躍した戦闘集団で、数々の悪行を
行ってきた者達だ。江戸時代に滅んだとされるが、実はその
末裔達が生き残っており、密かに現代でもその忍の力を持ち
隠してきた。

彼もその一人で、これまでも暗殺を繰り返してきた。

黒華が自分の席にいると他の生徒達もやってきた。

「おはよう凍世。相変わらず早いわね。悪人が時間を守るなんて」

「ほっとけ」

やってきたのは女子生徒で、長い紅い髪をしていて、目もその髪と同じ色をしている紅衛翔子（あかえしょうこ）だ。

美人風でスタイル抜群の女の子だが、黒華と同じくらい残忍な性格をしているが、同じ仲間には優しく、したわれているのでこのメンバーのリーダーもしていた。

「他の皆はまだ来てないのね」

「時間を守ってたら悪人じゃないから」

「ならあなたは良い人なのね」

「うるさい。俺は暇だったから来ただけだ。まあ来ても暇だから表の奴らでも襲って来るか」

「それはダメです。表で何か起きたら私達の存在がばれてしまうかもしれないでしょう。だから、同じ生徒には悪でも手は出さない様に決められているんですよ」

「わかってる。それなら他の奴らにするか」

「今は、おとなしくしてなさい。そのうち大きな仕事がありますから」

「つまらないな」

そうしているとチャイムが鳴り、先生がやってきた。

「今日はお前達だけか」

「そうみたいだな。先生」

「先生、他の皆は仕事ですか？」

「そうだ。春先は色々と動くことが多いからな。皆にも手伝ってもらっている」

「じゃあ俺達は？」

「お前達は騒動を大きくしかねんから待機だ」

「凍世はともかく私までとわ」

「お前も同じだろうが」

「そうだな。でも、もしお前達が動く時は大きな事がある事と思ってくれ。まあそれまでは待機だ」

「了解」

正式な教師ではないが、黒華達の上司である女性、進藤彩音（しんどうあやね）から待機を命じられた黒華達は何をすることもなくただ教室に居た。

彼らは表向きは存在していない者だ。区には死亡届が出されており死んでいる事になっているので、授業も何もしなくてよかった。

それなので暇を持て余している黒華は表に出て暇をつぶすことにした。街を歩く黒華。彼はこの光景が嫌いだった。

人ごみの中にどれだけの悪が蔓延っているか、黒華には見てすぐにわかっていた。

人は生きるだけで罪だといつも感じていた。

すると、公園の方で騒いでる者達があった。そこに行ってみると複数の女の子達が不良の男達に絡まれていた。

一人の女の子が臆せずに男に言い寄っていた。

「あなた達、私達は断ってるんです。すぐに帰りなさい」

「なんだと？こっちがせっかく遊んでやろうとしてるのによ」

「そうだぜ。言う事聞いておいておいたほうが身のためだぞ」

「どっちでも身のためにはならないでしょう。あなた達の目的はすぐにわかります」

「なまいきな女だな。一番いやらしい体をしてるくせに」

「ああ。まずはこいつからやっちまおうか」

「よし、行くぞ」

「優子！」

「大丈夫、皆は下がってて」

と、その女の子は前に出て構えた。それを見て黒華はすぐにわかった。あいつも忍だと。

その証拠に隠してはいるが、女の子は次々と男達を倒して行った。そして、最後の一人に女の子が攻め寄る。

「あなたが最後ですね。他の者達と同じようにされたくなかったらすぐに帰りなさい。そうすれば手は出しません」

「なんだこの女？俺達はこの辺では負けなしだったんだぞ。それが」

「どうするのです？続けますか」

「くそ」

男が戸惑っている所に黒華が出てきてしまった。

「なんだお前？」

「あなたも仲間ですか？」

「いや、ただの通りすがりだが、ちょっと見られなくてな！
お前が弱い者いじめをしているのが」

「弱い者いじめって、悪い者を退治して何が悪いんですか？
私は自分と仲間を守る為に戦ったんです」

「それが気に食わないんだ。なあ忍の者」

「！？まさか、あなたも」

「その通りだ。ちょっと付き合ってもらおうか」

「いいわ」

黒華は彼女を誘った。それに彼女も承諾する。しなければ
やばいと感じたからだ。

「優子」

「大丈夫だよ。先に帰ってて。後で連絡するから」

「でも」

「心配ないよ。私が空手やってるのは知ってるでしょ」

「そうだけど」

彼女は友達を帰して黒華についていった。不良の男は
何が起こったのかわからず、啞然としていた。

二人は近くの倉庫の中に入った。ここなら誰にも
見つからずに済むからだ。

「さて、相手の素性も知らずによくついてきたな」

「知ってるわよ。あなた悪人でしょ。私は善人（ぜんにん）だから
わかるわ」

「自分から善人というのか。同じ人を傷つけておいて」

「あれは悪い者達だからです。悪には裁きを受ける必要が
あります。でなければ平和になりません」

「平和か。この世に平和などない。お前も同じだ。誰かを守るから
相手を傷つけるという正当化をし、全て悪が悪いと言い、その
言ってる奴だって一つは悪行をしたことあるくせにな」

「それは誰だって間違いはあります。でも、それ以上の事は
しない様にできるのが人です。ですから」

「うるさい。俺はそういう綺麗事が嫌いだな。だから、お前を

この場で殺す」

「やられません。あなたの様な悪人にわ。行きます」

彼女は刀を取り出し向かってきた。黒華も刀を出し応戦する。
そして、決着はすぐについた。

「これで終わりだ」

「!？」

黒華が本気で切り込んで行った。その刀が彼女の胸を
貫いたが、そこには制服しかなかった。

「逃げられたか。この服も本来のあいつのものじゃないな。まあ
いい。次は殺してやる。覚悟しておくんだな」

黒華は倉庫を出て、学園に戻った。この事は誰にも報告を
しなかった。報告したらお仕置きされるだろうと思ったからだ。
こうして、悪人もそして、善人も動きだした。